

## 2018年度日本語教育実習 最終レポート

この大学の日本語教員養成課程は、1年生から3年生のカリキュラムで授業が組まれている。しかし私は、3年生の時期に休学をし、約1年間オーストラリアへ日本語教師アシスタントとして留学をしたことにより、本来3年生で終わるはずの日本語教員養成課程を4年生で終えようとしている。

この日本語教員養成課程で印象深いのは、大きく分けて1年次の「座学」と3年次の「実習」があることである。「座学」を学んだのはずいぶん前のことなので、学んだはずのことがどの程度身についたのか自信がない。そんな私ではあるが、胸を張って言えることがある。それは「日本語教員養成課程を通して得たものは大きく、必ず将来に役に立つ」ということである。私は将来日本語教員になりたいとっていて、この夢は中学校の頃から全く変わっていない。しかし、夢をしっかりと持っていたのにもかかわらず、日本語教員について全く調べなかったし、高校卒業後の進路も決めていなかった。高校3年生になってはじめて「日本語教員になるには、大学に進学した方が有利」ということを知った。時間の余裕もない状態で色々調べ、最終的に西南女学院大学に入学することになった。本大学に入る前と、入って何回かは、「もっとちゃんと調べておけば、日本語教員になるのに、より良い環境にいられたのに。」などと、よく思っていた。しかし今となっては、この大学に通えてよかったと思う。そう思えるのは、この西南女学院大学の日本語教員養成課程を担当されている横溝紳一郎先生と出会え、先生の授業を受けられたからである。私は、他の先生の日本語教育の授業を受けたこともなく、他の大学で日本語教員養成課程を受けている人に出会ったこともないので、単純な比較はできない。それでも、横溝先生のお話や授業への取り組みなどを考えると、この大学で横溝先生の日本語教員養成課程の授業を受けられてよかった、と思っている。以前「日本語教員養成課程で、実際に教えることをカリキュラムの中心にしている」理由を、先生から聞いたことがある。それは「日本語の文法等はいつでも（個人でも）勉強できる。しかし、教案作成、教材製作、授業の工夫などは、実際に行わなければならないし、それらができなければ、実習授業を行っても、教えるための「軸」がない状態なので、授業力を身につけることはできない。」という内容だった。この考えにもとづいて作られたカリキュラムなので、本学の日本語教員養成課程は、日本語教員を目指している人にとって非常に良い学習環境だと私は考えている。

これまで日本語教員養成課程で書いてきたレポートを読み返してみると、当時の自分なりに一生懸命書いていたが、経験も知識も少ないためか、出来栄は微妙で内容の薄いものが多かった。その中で変わっていたことがある。それは、自分の考えの変容である。ここに至るまで長い時間がかかっているため、他の授業や学校生活外の経験も関わっていると思うが、やはり授業で身に付けた知識が、考えが変容してきた一番の理由ではないかと考える。一番はじめに書いた「日本語教育方法論Ⅰ」のレポートと実際に体験をしてきた帰国後に書いたレポートと比べてみると、考え自体が変わったのはもちろんのこと、「そ

の考えを、より深く追求するようになったこと」や、「視野が広くなり、教師と学習者それぞれの立場で物事を考えられるようになったこと」が分かる。例えば、以前は「〇〇が大切だと思う。」と述べるだけだったが、今では「では、〇〇をするにはどのようにしたらいいのか」などを具体的に考え、分析することができるようになった。「日本語教育方法論Ⅰ」で行った日本語の授業分析では、学習者の気持ちや日本語教員の仕事をよく理解していなかった。現在の自分の経験と知識を以て、もう一度分析し、分析内容の違いを知りたいと思う。

自分の中で一番大きな変容のきっかけとなったのは、「日本語教育実習」の授業である。一番新しい記憶というのもあるが、やはり実際に外国人に日本語を教えたこと、リアルな現場で、本物の日本語教員と同じような状況を体験ができたことが、大きな変容の機会となった。この授業では、自分自身で教案を作って、その教案に沿った授業を、日本語学校で実際に一人で行った。授業を行うまでの準備過程と、授業後の結果を分析し「どのようにすれば自分の目標近づけるのか」「どのようにすれば学習者の学びが活性化するのか」等を考えた。自己分析、他の実習生からのアドバイス、そして横溝先生からのアドバイスをふまえ、完璧ではないが段々とコツをつかみ、授業が少しずつ様になってきたように自分でも感じた。教壇授業を通して、「授業を作るうえで大切にしたいと新たに考えたこと」と、「自分ができなかったこと」の両方がわかり、今後の課題を発見することができた。私は、「英語圏の外国人に、英語で日本語を教えたこと」「英語圏の外国人に、日本語で日本語を教えたこと」「様々な国の人たちに、英語で日本語を教えたこと」「様々な国の人たちに、日本語で日本語を教えたこと」等、状況の違う環境下で日本語を教えた4つの経験がある。それらの経験の中で、「日本語を教えるうえで大切だ」と思うことは変わっていたが、「どの状況でも教える上で大切だと感じたこと」が1つある。それは、「会話を主にして、教員と学習者で授業を作り上げる」ということである。これは実習を終えた今でも、授業を行う上で大切なことだと思っている。日本語教育実習で身に染みた「会話」の大切さは、3回ある教壇実習授業の中、1回目で感じ取ることができた。きっかけとして、他の実習生の授業を見て、自分と違うパフォーマンスを目の当たりにし、感銘を受けた。その授業は、私が思いつきもしないオリジナルに富んだアイデアに溢れていて、面白いものだった。そこで、会話をして授業を行うやり方を、2回目の実習授業で取り入れることにした。すると、学習者が主体的に発言し、教室の雰囲気がよく、授業がスムーズに行え、手ごたえのある授業となった。「会話をすることによって、学習者の主体性が上がり、日本語を使うことに対して自信がつく」という考えを強くした。主体性が上がることで、授業を楽しいと感じ、日本語に対する学習意欲が湧く。学習意欲が湧き日本語力が上がることを考えると、「会話」は外国語習得に効果的だと思う。会話は、授業を作り上げる時に効果的なだけでなく、教員と学習者の信頼にも繋がり、授業や学校や日本語に対する学習意欲にも繋がっていくと考える。

最後まで課題として残ったのは、「時間の使い方」と「対応力の向上」である。時間につ

いては、3回の実習授業でそれぞれ違うパターンのハプニングがあった。それは、「時間が余った時の対処法」「余った時間でも時間管理が必要なこと」「時間が足りないときの対処法」の3つであった。思った通りの時間には進まないのは承知の上で授業を行ったが、自分が思っていたよりも時間管理が下手だった。この時間管理については、たくさん授業を経験し、どうすればうまく時間をコントロールできるのか勉強していくしかないと思う。そうすれば、自然と、もう1つの課題である「対応力の向上」にもつながると考える。こういったことから、私は「会話を主にして教員と学習者で授業を作り上げる」ことを軸に、将来授業を作り上げていきたいと考えている。そして、課題として残っている「時間の使い方」と「対応力の向上」については、経験を積み、この2つの課題を克服していきたいと思う。